

平成31年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	公益財団法人 さっぽろ青少年女性活動協会	
施 設 名	札幌市こどもの劇場 (やまびこ座)	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内定額(総額)	24,234	(千円)
公 演 事 業	20,536	(千円)
人 材 養 成 事 業	2,963	(千円)
普 及 啓 発 事 業	735	(千円)

1. 事業概要

(1) 平成31年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	やまびこ座・こぐま座 巨大人形劇シリーズ	2020年2月7日～ 2月9日他	演目：「マルシュカと12の月」他 出演：滝沢修、鈴木幸子他 スタッフ：高木英紀、山中年弘他	目標値	4,500名
		中島公園内他		実績値	3,595名
2	プロデュース人形劇 『北海道の創作人形劇』 公演事業	2019年8月3日他	演目：「奇跡の庭」他 出演：須摩康平、白川さおり他 スタッフ：八幡浩暢、藤田直子他	目標値	2,980名
		飯田文化会館他		実績値	3,957名
3	『札幌国際人形劇フェスティバル』 ～北海道人形劇フェスティバル 60回記念&中島児童会館70周年 記念同時開催～	2019年9月7日～ 10月20日他	演目：「おとぎの国の郵便屋さん」 他 出演：よろず劇場とんがらし他 スタッフ：小崎さざな、橋本一生	目標値	3,300名
		札幌市こども人形劇場 こぐま座 他		実績値	2,585名
4	札幌市こどもの劇場やまびこ座 リフレッシュオープンフェスティバル	2019年4月2日～ 4月5日他	演目：「とりかえっこちびぞう」他 出演：タックル&ぽっけ&ぱぺっ とグース他	目標値	1,840名
		札幌市こどもの劇場や まびこ座 他		実績値	1,240名
5	古典の日制定記念 人形浄瑠璃2019 ～さっぽろ人形浄瑠璃芝居あし り座25周年記念公演～	2019年10月13日～ 10月14日他	演目：「絵本太功記 尼ヶ崎の段」他 出演：さっぽろ人形浄瑠璃芝居 あしり座他 スタッフ：西川古柳、福田恭一（福 田舞台）他	目標値	540名
		札幌市こどもの劇場 やまびこ座		実績値	551名
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

「未来ある子どもたちへの夢をはぐくむ」という基本方針のもとに、様々な公演事業、人材育成事業、普及啓発事業を組み立てることができた。子どもたちが自らの体験や経験を通じた可能性を育む事業はもちろんのこと、子どもたちに関わる大人たちへの人材育成、スキルアップ、さらにはより良い作品を創り上げるために様々な専門アーティストと連携した取り組みを実施することができた。また、地域からの要望に応える形でのアウトリーチ事業や国際的な交流事業の積極的な取り組みは、地域への貢献度も合わせ、札幌の子ども文化の発信となり、継続的な事業へつなげる契機となった。

札幌国際人形劇フェスティバル等の鑑賞事業の他に、巨大人形劇シリーズやプロデュース公演事業等への子どもたちの積極的な体験機会を創出し、子どもたちの笑顔を通じた地域づくりに寄与することができた。また、札幌以外の飯田や旭川、福島などの他都市との連携した取り組みが充実できたことは、やまびこ座、こぐま座のこれまで培ってきた全国的なネットワークによるものであり、子どものための専門劇場としての人材かつ創造的スキルという強みを生かしたものである。全国でも類を見ない人形劇等の子ども文化に特化した事業展開は、札幌の特色とも言える。

当初計画していた公演事業番号2の中の一つであった札幌・旭川共同制作「北海道の創作人形劇」は、旭川の担当の方の病気により受け入れ態勢が整わず、断念せざるを得なかった。また、プロデュース人形劇の移動人形劇場等の開催地や事業番号3「札幌国際人形劇フェスティバル」の中の春の特別公演。そして人材育成事業の中の3月に本番予定であったプロデュース公演は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、変更や中止に追い込まれ、事業の組み換えなどを余儀なくされた。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

やまびこ座、こぐま座は、開館以来、単なる鑑賞だけではない、文化体験や市民活動の創造拠点として機能している。人材育成を中心とした事業運営が功を奏し、継続的な市民劇団の育成、札幌の子ども文化の活性化、子ども人形劇団や表現活動グループの誕生につながっている。各事業を企画立案する中で特徴的かつ普遍的な考え方として、必ず地域市民を巻き込んだ形の事業展開に重点を置いている。今回の助成事業に関しても、その意義は顕著に表れており、地元の子どものたちや市内のアマチュア劇団が専門アーティストと協働した取り組みは大きな刺激となっている。人形劇や児童劇を通して市民が活躍できる場を創り出し、地域に還元できる仕組みは、文化的にも社会的にも大いに意味のあることである。その上で個々人が成長する場となり、必ず将来において札幌の文化が発展する継続性を秘めている。

近隣小中学校とのアウトリーチ事業や国際交流事業の取り組み、巨大人形劇シリーズやプロデュース移動人形劇場、人形浄瑠璃公演、市民劇団の育成事業などの劇団側と観客側双方の市民が成長できる仕掛けによって、活動内容や活動機会が充実していることは間違いない。その上で札幌という街が活性化し、様々な市民が集い、専門アーティスト、関係機関とつながることで経済的な意味も生まれてくる。また、札幌国際人形劇フェスティバルやリフレッシュオープンフェス、人形浄瑠璃公演等の伝統から現代まで、様々な国の、様々な作品を発信、提供できることもやまびこ座、こぐま座の強みであり、市民一人一人に対し、そして地域に対して文化的な潤いを与えるものである。さらに経済的な効果も高い。

今後の取り組みとして、障がい者への鑑賞やワークショップの機会を作る要望に応じていきたい。

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

《公演事業》目標としては、観客数、観客の満足度、札幌の子ども文化の発信、そして、子どもから大人までの人づくりを根幹とした地域活性化である。今回は特に中島児童会館 70 周年、北海道人形劇フェスティバル 60 回記念と大きな節目の年であったことも功を奏し、多くの子どもたちや市民の方々、さらに全国各地の方々と連携、協働した取り組みを行うことができたことは非常に大きな成果であった。

①入場者数等の目標値と実績値を比較すると、事業番号 1「巨大人形劇シリーズ」がコロナ禍の影響により 15 ポイントダウンしたものの、その他の事業についてはすべて達成できた。特に事業番号 2「プロデュース人形劇」、番号 3「札幌国際人形劇フェスティバル」は 20 ポイント以上獲得できたことは成果である。札幌国際人形劇フェスティバルの入場者数においては、1 回平均 100 名以上の動員を目標としており、実質 1 回平均 111.6 名と達成することができた。収益率については、全 5 事業のうち 2 事業の収益率が目標値から下がってはいるものの、概ね達成できていると感じている。しかし、全体から見て収益率の低さが課題であるため、収支バランスの再検討、入場料金の設定の再考等が今後の課題である。

②観劇者および劇団や事業参加者からのアンケートを実施したところ、90%以上の満足度をいただくことができた。特に「札幌国際人形劇フェスティバル」「人形浄瑠璃 2019」については、札幌でこのようなお芝居が観られることや人形劇に対する見方が変わったなど、驚きと喜びの声を多くいただいた。

③札幌の子ども文化の発信という観点からは、事業成果はもちろんであるが、今回は札幌以外の他都市においてメディアに数多く取り上げられたことは注目度と合わせ非常に有効であった。

④今回の公演事業での一番の成果は、全国各地の関係団体、劇場、そして地域の企業などの連携強化であったと感じる。新たな事業への挑戦も含め、地域の活性化や札幌の文化の可能性を大きく広げたと感じている。しかしながら、今回は新型コロナウイルスの影響により、2 月に実施した冬の野外人形劇の集客や 3 月実施予定であった特別公演の中止など、大きな影響があった。あらためて文化芸術の大切さを伝えていく使命が、我々文化施設にはあることを認識した。

《人材育成事業》最終的な目標として掲げていることは、市民劇団がよりレベルアップした活動が自主的に行われることである。継続してきたことにより、参加者それぞれの経験年数の違いにより、参加者同士で教え合う姿や学び合う姿、特に新規参加者への指導フォローなど、目に見えて成長している姿が伝わってきた。また、講師によるワークショップを経て、自分たちで考え、実行してみるという姿勢も頼もしさを感じた。次への目標として、よりグループの活動ということを意識し、観客の動員や参加者にとっての作品内容のニーズの検討など、より活動の幅を広げていけるような取り組みを目指していきたい。

今回は 10 月の発表公演は実施できたが、3 月のプロデュース公演は新型コロナウイルスの感染の影響により、中止せざるを得ない事態となり非常に参加者にとっても残念な結果となってしまった。しかしながら、逆に自分たちの活動を今一度振り返る機会となり、より結束力が高まったと感じている。

《普及啓発事業》大きくは子どもたちへの豊かな体験や交流機会の充実と地域人材の活用という 2 つの目標に分けられる。やまびこ座が拠点となり、事業を展開することで、地域における文化事業のモデルケースとして注目されている。地域の学校や国際機関からのあらゆる要望を受け入れるための、やまびこ座が持つこれまでの専門家とのつながりや子どもたちへの指導スキルは、非常に重要な強みである。今後、この強みをさらに生かし、人形劇等を通じた文化の街づくりを目指していく。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

《公演事業》

各事業において、当初計画していた実施場所の変更やコロナ禍に伴う公演中止などがあったが、開催期間については適正であった。また事業費については、公演中止の影響により総経費が1,200千円程度の落ち込みとなった。収入については、入場料収入の落ち込みはあったものの、プロデュース人形劇等の共催者負担金の増額により、合わせてほぼ同程度となった。支出については、公演中止により上演謝礼等の経費が一部発生せずに、収支のバランスが保てたと考えている。

■番号2 プロデュース人形劇『北海道の創作人形劇』公演事業

1 北海道の創作人形劇「奇跡の庭」移動人形劇場

実施場所について、当初は飯田市、札幌市内児童会館（10か所）、やまびこ座、砂川市、岩見沢市を予定していたが、結果、飯田市、札幌市内児童会館（8か所）、こぐま座に変更。また砂川、岩見沢については新型コロナウイルス感染により中止。代わって福島公演（2回）を追加した。

2 人形劇派遣公演

当初、厚真町、安平町、苫小牧を2月、3月に計画していたが、新型コロナウイルス感染のため中止とした。

■番号3 札幌国際人形劇フェスティバル

4「いぶし銀たちの競演」、5「仔熊夜会」等については、一部出演者の都合や体調不良等により変更となった。

《人材育成事業》

前半は、発表会を目標に基礎的なワークショップを中心に実施し、後半はよりレベルアップした形のプロデュース公演を目標に計画した。実施時期や期間については適正であった。しかしながら、コロナ禍に伴う最後の集大成であった3月の公演が中止になってしまったことは非常に残念であり、参加者もかなりの動揺を隠せなかった。公演中止による収支の影響としては、入場料収入の落ち込み（当初予定492千円→実質56千円）が大きく、自己負担額が膨らんだ結果となった。支出については、結果、公演中止にはなってしまったものの、それまでのワークショップや稽古、宣伝活動、製作準備等のための経費はかかっている。

《普及啓発事業》

普及啓発事業については、教育現場や関係機関との調整も滞りなく進み、開催時期や経費については、概ね計画通りに進むことができた。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

子ども文化の創造発信拠点として機能するやまびこ座、こぐま座は、市民劇団や子どもたちを中心とした様々な事業が展開されており、市民の人材育成を運営の柱としている。そのために、様々な専門アーティストとの関わりが必要かつ重要であり、単に指導ができるということではなく、こちら側の将来的な方向性やねらいを理解してもらうことでの指導が要求される。各事業における創造的かつ芸術的な部分においては人形劇、児童劇、人形浄瑠璃のそれぞれに演出、指導等を担うキーパーソンが存在する。

1) 沢則行氏（人形劇師、チェコ在住）

《プロフィール》北海道出身。1992年に文化庁在外研修生でチェコへ。プラハを拠点に、世界各国で公演。また、チェコ国立芸術アカデミー演劇・人形劇学部、米国スタンフォード大学、ロンドン人形劇学校など、多くの教育現場で講座、ワークショップを指導。2011年にポーランド・カトヴィツェ市よりEU文化都市賞を受賞。その他、国際的賞を多数受賞。2004年よりプロデュース人形劇や野外人形劇シリーズの演出、美術等を務める。

2) 西脇秀之氏（劇団回帰線主宰、劇作家・演出家）

《プロフィール》自ら主宰する劇団回帰線の戯曲「ホーム」で、第26回文化庁舞台芸術創作奨励賞佳作（現代演劇部門）を受賞するなど、札幌市内にとどまらず、道内外の評価も高い。2003年度より東区市民劇団の講師、やまびこ座プロデュース公演の作・演出を務める。

3) 西川古柳氏（八王子車人形西川古柳座五代目家元/国選択民俗無形文化財・東京都無形文化財指定）

《プロフィール》車人形の活動にとどまらず、国立劇場にて三人遣いを学ぶなど、様々な伝統芸能に精通。「伝統を踏まえ新たな発展を目指す」という柔軟な発想を持ち、日本国内のみならず、これまでに50カ国以上の海外での公演や指導等を精力的に行う。1994年の人形浄瑠璃活動開始当初からやまびこ座にて指導を行い、北海道唯一の人形浄瑠璃一座「さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座」を育て上げた。

3人に共通するのは、単に技術指導に収まらず、地域における人づくりを通して、人間性を高め、地域がより活発化することを目指した指導である。最終的には地元の劇団やアーティストが中心となって継続した活動をするための道筋をつけることが重要である。市民、専門アーティスト、そしてプロデューサーであるやまびこ座の三者によって事業を創りあげることにより、持続的な地域に根ざした温かみのある事業として成り立っている。

巨大人形劇シリーズやプロデュース人形劇、伝統人形芝居などの公演事業に関しては、人形劇や人形浄瑠璃という一般的なイメージを覆し、市民の予想を上回る芸術性を発信することができた。そこには多くの地元の専門スタッフがより関わりを持つことも大きな要因として挙げられる。その上で出演者が子どもたちやアマチュア劇団、また新規参加者を中心としたことによる影響は大きく、札幌市民の可能性を大きく広げ、かつ期待度を上げた。また、人材育成事業については作品の芸術性はもちろんであるが、集大成であるプロデュース公演を通して、大人だけでなく、子どもたちも含めた形での作品創りは、参加者が一過性ではなく、継続性を持った意識で臨むことが可能となった。

各事業を通していえることは、「札幌アマチュア人形劇団」「オニオン座」「さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座」「パペットユーススクール」「大雪座」など、地元のアーティストが育ち、自主的かつ積極的な活動が生まれてきていることである。普及啓発事業にも見られるように、地域の人材が、地域の子どもたちや市民に対し育成を行い、札幌の文化を創りあげていくことに繋がるのが理想である。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

各事業が一過性のものとならずに継続、発展させようとすることは、やまびこ座、こぐま座にとって重要な狙いである。

こどもの劇場やまびこ座、こども人形劇場こぐま座の指定管理者である公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会は、青少年の健全育成や青少年女性の社会参加、地域社会創造のための主体的な活動支援等を人とのつながりを通して行うことで、地域社会の発展と向上を図り、豊かな生活の実現に寄与することを基本理念として創設された財団である。その組織の中でやまびこ座、こぐま座は、こども劇場課として、子どもの文化を通じた人づくり、子どもの文化の発信拠点として、札幌では類を見ない専門的な施設運営を行っている。

《人材面》

指定管理の提案の中でも重要であることは、人形劇等の指導育成を担える人材を職員の中で確保することとしている。財団内での人事異動は実際あるものの、専門的な劇指導ができる人材、子ども文化を総合的にマネジメントする人材、専門舞台技術者については専門職として異動対象とはならない。そして、将来的な人材確保のための育成計画が重要な課題であり、舞台技術の研修、人形劇等の指導のための技術習得研修、育成ノウハウを養うための研修等、財団の人材育成計画に沿って実行している。また、今後の取り組みとして、更なる専門性を求めるときに他施設への派遣研修、実地研修などの積極的な取り組みも必要と考える。

ボランティア登録は、やまびこ座、こぐま座、それぞれにおいて35名程度の登録があり、読み語りのボランティアなどの事業での人材の他に、ロビー受付の市民対応や物販対応、指人形製作等の人材活用を積極的に行い、職員とともに劇場運営の一端を担っている。

《財務面》

項 目	2017 年度	2018 年度	2019 年度	備 考
指定管理費	62,523	67,657	69,616	
利用料金収益	6,880	1,643	5,118	
その他収益	20,392	36,254	44,510	入場料、指導料、助成金収入等
収益計 (A)	89,795	105,554	119,244	
人件費	41,605	40,865	48,089	
その他費用	45,896	58,422	70,822	
法人事業費	2,580	2,885	3,049	
費用計 (B)	90,081	102,172	121,960	
増減額 (A) - (B)	▲286	3,382	▲2,716	

指定管理費の7割程度が人件費となっており、残り3割、そして利用料金を合わせ施設の維持管理費用となってしまう。その中から事業費をどのように捻出していくかは、公的助成金の獲得やサポーター制度（企業、個人からの寄付）、上演収入や指導料収入といった形での予算獲得となる。ここ3年の収支バランスについては、規模の大きな事業実施等により年度ごとでバラつきがあるものの、5年間の指定管理期間の中でバランスを取れるような作りとしている。しかしながら、公的助成に頼る部分が多く、収入の不安定さは否めない。プロデュース事業を充実させていくことでの上演収入や共催団体からの負担金獲得、劇場スキルを外部に積極的に発信していくことでの指導料獲得などの方策を打ち出している。また、様々な分野との新たな事業展開、また地元企業との積極的な連携による事業展開の可能性を探っていく必要がある。